Warmth Melt

みゅうじん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗａｒｍｔｈ　Ｍｅｌｔ

【Ｎコード】
Ｎ５１９８Ｖ

【作者名】
みゅうじん。

【あらすじ】
あれから数年後の話し。壱はある事をきっかけに昔別れを告げた筈の棗と再会してしまう。Ｆｉｎｄｅｒｓ，　ｋｅｅｐｅｒｓ．続編。ＢＬ、ボーイズラブです。

プロローグ１（前書き）

おひさしぶりです。初めましての方は初めまして、みゅうじん。です。
前篇ファイキー、ＰＶ３４万突破ありがとです！

そんで続編です・・・。
リアルが忙しく、なかなか更新されない事もあるかと思います
今小説でＮＬ（ノーマルラブ）が多々出てくるかとは思いますが、土台はＢＬです。
後でちゃんとそれっぽく・・・

また、前篇Ｆｉｎｄｅｒｓ，ｋｅｅｐｅｒｓ．を見ていない方にはわけがわからん感じになっていますので、あしからず。

プロローグ1

「なぁ、卒業したらどーすんの？」
最近じゃこの街にも発砲事件だとか強盗だとか、まぁいろいろ物騒な事件が相次いでいる。大きなＴＶ画面に映るニュースでも隣町の事件がトップになってたりもしているし。日本じゃこんな事はまず少なかったよな、なんて、最近じゃとっくの昔にお別れした日本を懐かしみ思い出す事が多くて困っている。それでもこの国に来て、この街に来て、それくらいの年数は経った。どうだったかなー？とか思う事だって多くて、俺の脳はすっかり日本を忘れていた。
「どーもこうも、なぁ。院、行こうと思ってるけど」
渡米した先で知り合ったただ一人の、年の近い日本人。兵藤明（ひょうどうあき）は、出会った頃から何一つ変わっていない。
――回想録―。
１７歳。渡米して、帰国子女やら異国の国から来た人が入るような、所謂（いわゆる）インターナショナルスクールと呼ばれる学校に入った。中には本当に異国の人が同じ学校に居た。まさに異空間だと思った。学校の外はアメリカ人ばかりで、学校の中にはアジア系からアフリカ系からさまざまな国籍の人がいた。もちろん、俺の他にも日本人だっていて、日本語が喋れる人だっている。
それでもやっぱり外人ばかりで、というか外人だらけで、本場の英語は発音が良すぎて慣れるのに少しだけ時間がかかった。いくら日本人がいるとはいえ、俺と周囲にはやっぱり言葉の壁と言う大きな障害があった。気まずい雰囲気。それでもいつか慣れると、足を学校へと進めた。同じインターナショナルスクールに入っていたらしい明を見かけたのは、ちょうど入って１週間後の、校門前の帰り道だった。どうやら話しを聞けば、明は俺の１年先輩だったらしい事が発覚した。
「あれ、……こないだ引っ越してきた…お隣さんだよね？」

「は？」
見たことの無いその人物に、目が点になる。
「あぁ、窓から見てただけだから。あれ、違った？」
違うかどうかは知らないが。
「ついこないだ引っ越してきたんだ。だから多分、それあってると思う」
「そっかそっか。ここら国際校てここしかないから、多分はいってくると思って探してたんだ。同じジャパニーズだし、それもお隣さんだろ？　それに年もちけぇ」
どうやら話しを聞いていれば、明は俺の１年先輩だったらしい事が発覚した。
「……年も近いっ、て…？」
「俺１８歳だぜ？　あれもしかして若いふりして年食ってる？」
「……」
それはアンタだろ？！　なんて思いながら、俺は１歩引き下がって、その男をまじまじと見てみた。
「見えねぇー」
驚いた。
なんせこの男、最初に会った時はその大きさにびっくりした。１９０はありそうな身長に、筋肉のついた体。正直成人を越えているかと思った。
「あー、俺バスケやってんの」
「へぇ、すげぇな」
その言葉で、何かすべてを納得できたと思った。この大きさでこの体格。バスケ競技は本当にコイツにぴったりだと、そう思った。
「そういうあんたは、何かやってんの？」
「んー……」
今はもうやってはないけど、昔、俺の全てをかけてもやっていたいと思っている事はあった。
「昔な、弓道を少しだけ。もう結構前にやめたんだけど」

初恋と、裏切りと、恐怖と、悲しみと、怒りと。淡々とした感情や直接的な気持ちを教えてくれたモノを、少しだけ思い出す。
「いかにもジャパニーズって感じだな、懐かしいなー弓道。俺やったことねぇんだけどさ。エマが喜びそうだな。あ、エマってな大のジャパン好きな友達」
「エマ……ちゃん」
「俺もあんたと同じ日本から来たんだけどな、そういう昔からの伝統？　みたいなもんをちっとも知らんくて、いつも怒鳴られてる」
「へぇ……」
「今から会う？　ちょうど今公園でバスケやってるし、皆居んぜ。きっと喜ぶ」
瞬間に、『これはチャンスかなー』と、少しだけ思った。何せこっちに来てから早1週間。日本についての質問は結構な量されてはみるが、中々頭の中から英文がスラスラ出てこない。ここでいろいろお近づきになれば、慣れるものも早く慣れるだろう。
「あ、でも俺、バスケとか、やんねぇんだけど……」
「Ｄｏｎ'ｔ　ｗｏｒｒｙ！　エマなんか興味も何もねぇからさ！　あんたも来いよ、な？」
心配すんな。
とりあえずバスケに関しては何も心配は無いらしい。バスケの本場で初心者が混じってとか、足引っ張るどころか邪魔している風にさえ思えてくるだろう。
「うん、じゃ行く」
「ＯＫ！　ＯＫ！　Ｌｅｔ　ｉｔ　ｇｏ！」
妙に饒舌な英語がたまーに会話に入ってくる。日本にこういう芸人が昔確か居たはずだ、とか思いながら、俺はジッとその大きな体を後ろから眺めていた。
「あ、そうだ」
大きな体が、俺に振り向く。
「あんたの名前は？　まだ聞いてなかったよな？」

そういえば、と。俺も聞き返す。
「俺も、そっちの名前聞いてなかった」
言語の違うこの国でこの存在は、かなり大きなものになるんだろうなぁ。なんて、俺は無意識に笑った。
「俺は有沢壱（ありさわいち）、よろしく」
「へー、かっけー名前」
そんな自己紹介の後、それから少しばかり歩いて、公園のフェンス越し。
向こうではバスケボールのダムダムした音が鳴り響いている。兵藤と名乗るその男は向こう側で必死になってボールを追いかけまくるその人達に声をかけた。ダムダムとした音が止み、声の主はどこかどこかと顔を左右に向けている。
「エマ！」
見た感じ、黒人と白人の、どれも男ばかりにしか見えない。その中で、兵藤はエマ、と、そう女の子の名前を呼んだ。返事はない。
変わりに野太いカタコトな声が聞こえた。公園の入り口はもう少し先に会って、俺はヨタヨタと兵藤の後ろについていった。顔を合わせたその人達が、兵藤とハイタッチをしていて、こういうのもアメリカンだなーなんて思っていると、その後にジーッとがん見されていることに気付いた。
まぁ、当たり前な反応だろう。
「あぁ、この子は壱。最近引っ越してきたジャパニーズ」
言語も目の色も顔立ちさえも違う人間。珍しいけれど、そんな珍しい存在でもない。
「あー……よろしく」
慣れない英語。多分こいつらから聞いたらカタコト何だろうなーなんて、自分が外人の日本語聞いた時の事を思い出した。
「俺はアントニー、こっちがヤコブ、ジョン、ハーバー、よろしく、壱」
俺に笑いかけた白人は、アントニーと名乗った。

「アントニー、エマはどこだ？　会わせたら喜ぶだろ」
それぞれの自己紹介を後に、兵藤はエマの居場所を聞いた。俺と会ったくらいでそんな喜ぶくらいの日本好きなんだろうか。
「エマならいつものとこに居るぞ、まーたジャパニーズヒストリーのお勉強中だよ」
日本史の勉強。
「あいつも好きだなぁ……壱、向こうだ。行こう」
「ん、……」
兵藤が指を指した先には大きな大木があった。日差しが照りつける中で、そこだけ大きな木陰を作っている。視界から見える木の裏にはベンチらしきものがあった。ふいに涼しい風がスーと吹いていく。目を凝らしてみると、その風に合わせて髪の毛がサラッとなびくのが分かった。
「エマ」
木陰の辺りに近づいて、少しだけ立ち止まった。先を行く兵藤の声に合わせて、ふいに白い指がなびく髪を耳にかける。
「エマ、驚けよー？　俺の新しい友達」
ニヤ、とエマに笑いかけた後に、兵藤は俺にアイコンタクトを送った。止まっていた俺の足はその方向に向かって歩を進める。次第に髪の毛と指だけしか見えなかったそのエマと言われる女性の顔が見えてきた。最初は横顔だけしか見えなくて、その次に長いマツゲが見えた。マツゲのその下のアーモンドの形をした目は蒼い目をしていて、俺は一瞬だけ、その色にくぎ付けになってしまった。
「有沢壱。俺と同じジャパニーズで、最近日本からこっちに来たんだと。正直、俺よりも日本に詳しいぜ」
驚いたような。とりあえず目を見開いて、じーっと俺の方をただただ見つめていた。手に持つ日本語で『日本史B』と書かれたその本は、そういえばどこかの文書店で見たことあるなーとか、そんな事はどうでもよかった。ただ目を逸らさずに互いを見ていた。
沈黙を破ったのは、エマだった。

「ほんとに日本人？」
「え……？」
思いがけない一言に、俺は拍子抜けした。
「明とは全然違って見えるね、どして？」
「どうしてってもなー……」
兵藤が困ったように眉を吊り上げた。
「この通りだ、不思議ちゃんって奴なんだ、コイツ」
日本語で俺に耳打ちした兵藤は、なんだか面倒臭そうにそう訴えた。『不思議ちゃん？』と、聞きなれない日本語に興味を示しながら、エマはその金髪の細い髪の毛を掻き撫でた。
「綺麗な子」
エマが俺を見ながらそう呟いた。言いたいのは俺の方だったのに。
「……」
海見たいに深くて、空みたいに鮮やかな色。その色は妙に懐かしくて、目に吸い付いてくるようで。
正直、目を奪われた。

プロローグ2

「エマ！」

大の日本好きフランス人、エマと出会ったのは学校帰りのバスケコートのベンチだった。長くきれいな指と、それ同様きれいな金髪の髪の毛。海と空みたいな目は吸い付いてくるように澄んでいた。

日本大好きなその子と、結構日本の文化を知っている日本人の俺。条件交換と言うか、出会ってそれから、俺が彼女に日本を教えたり、変わりに彼女から語学を学んだ。気が合う存在。当然その中で友情が育み、それから仲良くなりすぎた距離からは、それっぽい感情だって生まれた。

「イチ、見て！　バラって字書けるようになったの！　日本人は器用だね。こんな短い線の塊いつも書いてるんだから」

大きなスケッチブックにでかでかと、偏った『薔薇』の文字があった。

日本の漢字は元々中国から教わって、それをパクったモノだとはついこの間教えたばかりだ。それから漢字検定を受けたい、だとか、日本検定とかある？　だとか、本人は受ける気マンマンの、何やら大事（おおごと）までに発展していた。

「エマ、寿司食べたくない？　今日家で母さんが……」

「おうスシ？！　ホームパーティでもするの？」

「え、いや……そういうわけじゃ…普通に、夜ごはん招待みたいな…」

「夜ごはんにお寿司なんて、やっぱ日本人てゴージャスだね！」

最初。俺がいない間、仲の良かった日本人の兵藤は一体エマに何を吹き込んでいたのか、一回問いただしたいと思った。これは酷いと、心の中で何かが音を立てて切れ、いよいよ兵藤に問いただした時のアレは今でも忘れない。

「だって面白いじゃん」

へらへらした顔でそんな事を言ったので、やっぱり一発チョップしてやった。なので、一緒に話してみて、エマは日本人基、日本を大きく誤解していた。日本の交通システムには実は犬ゾリがあるとか、金閣寺にはラストサムライが居るとか、本当意味の分からない事だらけで、こっちが焦った。それを修正するのに、もう何千の時間をかけたことだろうか。

「どうしたの？　具合悪い？」

肩を下ろしてため息をついていると、ふと心配したように顔を覗かせるエマがいた。蒼い目が俺をうつす。綺麗だなーと、その目を少しだけ見つめた。

『恋人』

こっちにきてからつい半年がすぎた。さっきも言った通り、仲良くなりすぎた距離からは、それっぽい感情だって生まれるので。

「なんでもないよ、」

俺とエマは、付き合っていた。

コイビトドウシ。

街中でデートだってするし、手だって繋ぐ。キスだってする。人に関係を隠す必要も無く、堂々と愛を語れる。忘れていたそれは、気持ち良い事だった。

そう、だから。

あいつとは、完全に違っていた。

思い出せば笑えない程にありえない事をしていたんだと思う。今でも嘘のようだ。

『竹中　棗』

男。同性。顔が女の子みたいに可愛いわけじゃない。身長だって、体格だって立派な男で。俺はそいつが、好きだった。

そう、好きだった。

今思えば、あいつは特別だと思う。普通なら俺が男なんか好きになるわけないし、だから、あいつは特別。なんか、そういうオーラとかがあったんだと思う。でも、それだって、あっという間。一瞬

だ。もう俺の中からあいつは完全に通り過ぎさって、遥か向こうにいる。距離的にも、感情的にも、だからもう好きじゃない。
それでも、エマとキスをするたび、たまに思い出すあいつの顔が消えないのは、なんでなんだろうか。キスをした回数だってもうエマの方が完全に上回っている。エマはちゃんとした恋人で、それでも、俺は棗とは付き合ってもいなかった。
付き合ったら、そういう関係になったらダメな存在。
だから離れてやったのに。
「ちょっと昔の事思い出してただけ」
お前はもう、俺の過去になったんだ。
「行こう、母さんたちが待ってる」
そうして笑ってから、エマの頭をできるだけ優しく撫でた。瞼の裏に張り付いた棗の顔を無理やり振り払い、俺は歩き出した。

プロローグ3

そこから話しは大きくに変わるが、俺がアメリカに来て5年、エマと付き合い初めて4年半が経った時の話しをする。

出会ってから、仲良くなり、その仲良くなりすぎた関係からはそれっぽいような感情が生まれる。そこからは、ある選択肢が生まれる。付き合って恋人同士か、付き合わないで友達のままか、はたまたぎくしゃくしちゃって口も利かなくなるか。付き合えばまた次の選択肢が生まれ、付き合わなくてもそれは変わらない。俺とエマは付き合うと言う選択肢を選んだ。そうして恋人同士になり。そしてまた、時は経て、選択肢が生まれる。

ずっと一緒か、別れるか。

「どっちが、壱にとって幸せかな？」

突きつけられたその選択は、あまりにも単純すぎてため息すら漏れた気がした。

「ずっと、一緒」

そう一言答えて飲み込んだ紅茶は、味がしなかった。味がしなくてもう一度ペットボトルに口を付けてそれを飲み込むが、やっぱり味がしない。不思議だな？　なんて思って紅茶を覗くと、紅茶の水面が震えていた。無意識の震えよりは、激しいような気がして、ペットボトルから目で辿って、腕を見た。フルフルと震える腕が、今自分が物凄く動揺しているのだと、そう直感していた。

「ホントウに？」

「……なんで？」

直視した青い目だって、微かに揺れている。

「何か選択して、どれかを選べば、そしたらそれからまた次の選択肢が出てきて、それのループ。良い選択をすることだってあれば、その逆も。その中には、自分一人勝手じゃ選択出来ない選択肢だってあるの。二人の選択肢だって、三人だって、それ以上だって。ね

ぇもし、このまま『ずっと一緒』は、壱にとって良い選択？」
風で、その綺麗な金髪がなびく。大木の木陰は良い感じで俺を涼ませてくれた。その前に汗だってかいていたから、少しだけ肌寒い気もするが。多分その体感温度の理由はそれだけじゃないはず。ベンチに俺とエマ。間に人一人分の空間がある。その距離が、すごく遠い気がした。
ずっと一緒が俺にとって良い選択かなんて、何でそんな事を聞いてくるんだろうか。俺はエマが好きで、だから付き合って。
俺は――。
「私にとっては、良くも悪くもない。何も無いの」
彼女の綺麗な横顔が、少しだけ妬ましかった。
「私の中で、私と壱との間に、何も無いの」
悲しい。何故かそんな感情は湧かなかった。込み上げて来るのは愛しみと、憎しみと、懼(おそ)れ。
「こんな私とずっと一緒は、壱にとって良い選択？」
正直、殺し文句だ。あんな事言われてそれは、じゃあ、俺は何て言えばいい。俺はエマとずっと一緒に居たいと思う。エマは思わない。それどころか俺と一緒は無だと。
「俺は――」
俺は、何て言えばいい。
どうすればこの絶対絶命危機から抜けだせる。何を言えばいいかわからない。それでも言わなきゃすぐ後に待ってるのは絶望で。それじゃあ俺は何と口にすればいい。
とくかく、なんでもいいから。なにか。はやく。
「っ、……」
「　、」
何て言葉にすればいいか、何を言葉にすればいいか、分からなかった。
分からなかった。
＊

そして話しは、冒頭に戻る。

プロローグ4

「なぁ、卒業したらどーすんの？」
薄暗い部屋の中。外の日もだんだんと暮れを増してきている。その中でピコピコ光っているＴＶのゲーム画面が鬱陶しくて、ふいに電源を消した。
最近じゃ何をやっても心が晴れなくて困っている。少しでも間があれば何かを心の中で思い、その思った事が徐々にマイナスな方向に動いて行っているし、憂鬱だった。
「どーもこうも、なぁ。院、行こうと思ってるけど」
憂鬱な中、誰とも喋りたくないけれど、喋らなければまた変な事を考えてしまう。しょうがないので、返事を返した。
出会った当時の、昔から変わった感じの無い兵藤明は相変わらずだった。俺より一つ年上で、俺より数十センチ背の高い巨大な奴。
「院かぁ、ま、壱らしいけどな。何、院行ってそのまま大学残るつもり？」
「それもいいかもしんねぇけど、特に好きって事も無いし、就職までの時間広げてるだけ」
「へぇ」
「へぇってなぁ……お前が来いってからあんな偏差値の高いとこ頑張って受験したってのに……」
今でも忘れない。
インターナショナル時代。俺はやっぱりまだ『外国』と言う所に慣れていなくて、明やその仲間や、エマなど、そこら辺の人物とばかり一緒に居た。残念な事に、その中に俺と同学年のやつは一人もいなく、クラスでは已然として微妙な孤立を経験していた。無論、やっぱりその中で特にやる事も無いので勉強をしていた。だんだんとテストの点数も良くなりついにはその学年のトップにまで上り詰めてしまった程だ。そんなわけで。

「飛び級？」
日本ではありえないような事が起こってしまった。
「そ、１年飛び級。君はもう次のステップに進んでも良いような学力だからね」
いきなり校長に呼び出されたかと思えばそれだ。やっぱり俺の家族も飛び跳ねて喜んだ。俺が飛び級なんて、果たして大丈夫なんだろうか。だってここはまだ俺の知らない事のばかりな国で、その中で……。
「よう壱！　やったな！　飛び級ってな結構すげぇぞ」
断ろうか迷っていた時に現れたのが明だった。１歳年上の１個上の学年の、１個となりの家の明。
「あぁ、え。そうなのか……」
これは、チャンスと言うか。なんと言うか。これは受けなければ、俺は一生孤立した面白味の無い学校生活を送っていたんだと思う。それならば、と、俺は不安を打消し、飛び級を受け入れた。勉強についていけなければ、またそれ程の努力をすればいいと思った。それに、この学年には明が居て、エマが居て。
「俺、そこの大学受けるからさ！　壱も一緒に受けねぇ？」
インターナショナル卒業まであと半年くらいの時に誘われた一言。口にしたその大学は前まで日本に居た時の俺だってしっている超有名大学だった。入れるのならそれはすごいが、その大学の受験は絶対に厳しいモノだとは分かり切っていた。
「明、……お前がチャレンジャーなのは分かったから。無難にもう少し偏差値の低い大学にしようぜ」
「大丈夫だって！　壱頭良いしさ！　俺だってお前に教えてもらえりゃ入れる！」
「俺が教えるのかよっ！」
そんなわけで、色々ごたごたがあり、色々と色々あって、その某有名大学に受かった俺と明だった。
合格発表で番号があったときは俺と明の両家族で盛大に盛り上がっ

たその中にはやっぱりエマだとか、そんな人たちも色々と来てくれて、俺と明を祝ってくれた。
それなのに。
「俺大学辞めるなー」
そう軽々しく言ったのは大学のキャンパス内で、もうすぐ3回生になろうとしている時のことだった。折角俺が勉強を教えてやって、本人も全力で勉学に励んで、やっと入った大学だというのに。
「は？　なんで」
「勉強、ついていけなくなっちった」
語尾の後ろに星マークさえついていそうな、そんな風に軽々しく大学を辞めた。ていうか多分、ついていけなくなったって理由だけじゃない筈だった。勉強が分からないんだったら俺に聞いてきていたし、だから多分、面倒臭くなったか、何かほかの事情があるか、きっとそれだけだ。
「ていうかさ、お前ももっと砕けた生活して見ろよ、こないだ人生の機転過ぎたとこじゃんかよ」
「……」
こないだってのは多分、俺がエマにフラれてしまった辺りの事を言うんだろう。俺が落ち込んでいるのもそのせいだと言うのにコイツは……。
「そんな壱に向けて、俺からプレゼント？　……って言っちゃっていいのかね、これ」
「？」
逆に聞かれても困る。
そんな事を思いながら明を観察していると、ふと引き出しの中からA4サイズの少し分厚い、黄土色の封筒を取り出した。なにやら厳重にされているそれを手渡され、少しだけ不思議に思ってみた。

プロローグ5

差出人。

「ほしぞら……出版創社…？」

「あー、それ『ほしあき』って読むらしいぞ。俺もこないだ知った」

星空（ほしあき）出版創社。

日本語で書かれているので、おそらく日本の出版社何だろう。そもそも何の接点もない向こうの出版社からの封筒が俺へのプレゼント？　なんて、少しだけの不思議がそれ以上の疑問を呼んだ。

厳重に封をされたそれを、ゆっくりと開けてみる。中に入っていたのは数枚の書類と、パンフレットのような薄い本。その書類の１枚を手に取ってみた。署名記入欄や、押印欄。まるで、いつもどこかで見るような、契約書、みたいだった。

「なんだこれ？」

契約書みたいなその紙を明に手渡す。明はその紙をまじまじと見た後にふん……と鼻を鳴らした。

「早いな。さっすが壱」

「は？　何言ってんだ。俺何もしてねぇよ」

「いーから、他のも見てみろって」

促されて他の書類にも目を通してみた。

さっきの契約書みたいなものはやはりそのまんま、契約書のようだった。その契約書の、契約詳細内容が記載された紙が出てきた。その他にも、出版社の地図やらなにやら……。最後の一枚は、ズラっと文字の書かれた物だった。

初めに書かれた宛先は、『有沢　壱　様』

俺。

「……？」

明の言ったように、これは何かのプレゼント何だろうか。今だ意味も分からずに、その次の文頭からを黙読し始めた。

「……」
読み進めていく度に湧き起こる、何かの興奮感。テンションが上がるような興奮とか、そういうモノじゃなくて、こんな事をありえないと、驚き。そしてまだ消えない不思議。
内容は単純にこうだ。
あなたの書いた小説は大変すばらしい作品でした。この才能を我が社で発揮させてみませんか。是非ご連絡ください。
纏めればこんなに簡単に済む内容が、拝啓から草々まで、約４０行くらいにびっしりと詰まっている。いや、そんな事に驚いているのではなくて……。
「なんっ……いや。小説って…あれ？」
覚えはある。
それは所謂、思春期の恥ずかしい行動、ってヤツで。
「お前さー、小説書いてたっしょ。自分の家のＰＣで。それＵＳＢにコピーして、送り付けた」
「……」
俺の恥ずかしい行動の恥ずかしい小説が、明に見られ……いや、明だけじゃなくて、日本の…。
「お前っ！　何やってくれてんだこの野郎！　ふざけんなっ！」
怒りは現状を把握した途端、突然にやってきた。
「いや、いやっそんな怒るなって、」
「怒るもなにもなぁ！　俺がガキの時に書いたあの恥ずかしい文章がお前だけじゃなくて日本の奴等にまで見られて……。国境超えるって……なんつー…なんつー壮大な……プロジェクトＸ…」
言葉を吐きながら怒りをぶつけるのも嫌になってきて、俺はテーブルに額をくっつけて泣いた。自分でも何を言っているか分からない。
「あー……恥ずかしい。ホントねぇよ……俺これからどうやって生きていけば……し、…もう死んだ方がいいのか？」
「え、そこまで……。つーかさ、その『恥ずかしい文章』が……」

「恥ずかしい文章とか言ってんじゃねぇ！」
余計恥ずかしい。
「最初に言ったのお前じゃん！　……あー、てか話しを最後まで聞けっ。昔書いたその恥ずかっ……人に見られたくない小説を人に見られて、そしたらその小説が評価されてんだぜ」
「……」
褒められてるのか、慰められているのか、もうよく分からなかった。
「お前、来年卒業だろ？　特にする事も無いんなら、この出版社の言う通り、才能発揮させよーぜ？」
「才能発揮ったって……それ書いたの、こっちに来てまだ少しくらいの時だぞ…もうそんな才能……なんて残ってねぇしそれに、そんな博打打ち…」
「才能なんて衰えるだけで消えやしねぇよ！　衰えてたってまた元に戻るもんだっつの。それに、さっきも言っただろ、お前ももっと砕けた生活してみろってよ」
俺くらいはやりすぎかもしれねぇけど、と補足。
「博打だって、当たりゃ大儲けだし」
「はずれたら？」
「まだ若いんだし、大丈夫！」
『若い』なんて理由が、俺に通用なんてするかよ。
「……」
それでも親指をグッと天井に突き立て、そう明は笑った。

プロローグ6

物語の主人公は、女の子。これは本当に決定事項で、昔の俺に出来なかった事を、この子はよく忠実に再現してくれた。女の子は俺とは違って、物事を伝えるのが苦手で、それでも想い人に頑張って想いを告げてくれる。そんな感動的な、ありえない話し。

最終的にはハッピーエンド。俺には出来なかった事を、本当によく再現してくれた。もしかして俺かあいつのどちらかが女の子で、そしたら、世の中はこの小説みたいに、俺達をハッピーエンドに導いてくれただろうか。

「……くせぇー…」

昔の自分は、本当に子供全開で、夢ばかりを描いていた。それでも決断するべきところはしているし、人間の心理と言うやつか。

「……」

PC画面、封印したはずのその小説画面を開き、ため息をついた。文章も構成もまだなってなくて、これが本当に出版社に絶賛された物なのだろうかと、少しだけ呆れた。マウスをちょいちょい動かし、文章を下へ下へ流していく。

「『絶対的なさよならなんて無ぇよ』……って、」

あるっつの、バーカ。

棗の性格によく似た主人公の想い人の台詞にイラついた。元はと言えば昔の俺が書いた文。なので、昔の俺にイラついた。

本当なら、もう今すぐにこのデータを消してやりたい。この世から抹消して、そしたらこのイラつきも多少消えるんじゃないんだろうか。それでもこの複製データが国境を越えて日本にある。消したって、イラつきも何も消えない。

「どうすりゃいーんだ……」

博打打ちは最初から嫌いだった。何事にもマニュアル道理にやる事の方が好きで、それが俺に一番あってるやり方だとも思っている。

昔から。
明のくれたプレゼントは、俺にとってはある意味大きな壁。日本から米国に来て、そしてまた、米国から、日本へ。数年が経っている。そりゃ何も変わってない事なんて、あまりにも少ないだろう。そんな中で更に博打なんて、自ら地獄に向かっているだけのようにも感じる。
「でもな……」
俺はこのまま、何もやるたい事もなく、アメリカで暮らし続けるのだろうか。院に入って、無難なサラリーマンに就職して、それから？
『お前ももっと砕けた生活してみろって』
明の言葉が、脳を過る。
「また、……選択…」
人生は選択の繰り返しだと、エマが言った。いい加減、飽き飽きした。その選択毎に真剣に考えなければいけないなんて、俺はこの残りの人生で、後何千、何万回の選択をしなければいけない。
1回くらい、砕けた選択をしてみてもいいんじゃないか、とか。1回だって真剣に考えなきゃいけない、だとか。
「……」
もう分からなくなってきて、頭を抱えた時だった。
「壱ー！」
見覚えのある声に、ふいに後ろを振り向く。いきなり顔面にぼふっとした感覚がして、またか……と嘆息した。
俺の妹。
「うわー壱のエッチ―！　妹の胸に顔付けちゃってー」
そう言いながらゲラゲラ笑うその顔に、羞恥心も怒りの一つも無かった。
「唯子、……もう少し羞恥心てのを…」
「おじさんの説教はいいです！　……って、…何それ、小説？」
しまった、と思った。

俺の昔の恥ずかしい思い出が、しかも実の妹にこれを見られるなんて……。そう思った途端に、俺はさっきまでの会話を思い出す。
これはもう日本に持ってかれた。明にだって見られてる。それじゃあもう、開き直るしかないんじゃねぇんだろうか。妹一人に見られたからって、もう何かが変わるわけでもあるまい。失うものはもう無いような気もする。
「俺が昔に書いたやつ。あ、読むなよ？　これ、明が出版社に送りつけちゃったんだよ」
しかもそのまま俺氏名で。
そこまで言うと、唯子の目が急に見開き、キラキラと輝きを放ちながら俺を見つめた。
「えー！　それでそれで？！」
結果はどうなっているのか、それが知りたいんだろうと、俺はさっき明からもらった黄土色の封筒をう唯子に手渡した。
厳重に封されていたそれは、俺によってもう厳重の『げ』の字も無い。出来るだけ丁寧に封筒から書類を取り出した唯子は、しばらく少しだけ静かになって、それからまた声を張り上げた。
「すっごーい！　壱凄いよこれ！　お母さんっ！　おかあさーん！」
唯子が大声で母さんを呼んだので、俺はぎょっ、とした。急いで唯子を止めるも、一足遅く、唯子の声を聞き、何事かとアセアセとやってきた母さんの姿をこの目に移したとき、これは大事（おおごと）になってしまうかもしれないと、そう確信した。

プロローグ7（前書き）

棗視点

プロローグ7

「俺が絶対見つけるから、お前のこと」
本当に好きだったと聞かれてみれば、本当に愛してたと答えられる。
どれくらい好きだったと聞かれてみれば、頭から焼きついて離れないほど。それ以上、犯罪をも起こしてしまいそうなくらい。
だから、行かせたのかもしれない。
アイツの泣く顔は見たくなかった。悲しくなんてさせたくなかった。
「だから、俺は女じゃねー」
そう思う度に、アイツのその言葉を思い出す。そうだ、アイツは立派な男だ。柔らかくもないし、弱くもない。
でも大切にしたかった。
それくらい愛してる。今でも好きだ。
忘れてみようなんて思ったことはない。だけど、俺ももう子供(ガキ)じゃない。この厳しい社会を乗り越える為に、生き残る為に色々な事をした。抱きたくもない女を抱いたりもしたし、汚い事もした。誰かを泣かせた事もある。良心が痛む為に、俺はまだ壊れちゃいないと確認できた。
「……」
あれは何年前だったろうか。
壱を最後に見た空港。最後に1回キスをして、背中を押して笑って送ってやった日。あの時見た笑い顔は、今でも忘れていない。
あんな幸せそうな顔を、忘れるわけがなかった。あれで何度立ち直れた事だろうか。
「6年……」
あぁ、そうだ。6年。俺と壱が離れて、6年が経ったんだ。
成人して3年が経った。

なのに、俺はまだお前を見つける事が出来ないまま。この日本っつー小さな国にいる。大きいと思えた日本を今じゃ小さいって思えるようになってきた。
そんな地位なのに。なんでまだお前との距離が縮まらないんだろうか。
「……壱」
＊
今年は去年にも増して暑苦しい夏が全身を襲ってきやがった。
寝る為だけにあるようなだだっ広い家のベッドから目を覚ませば、頭も体もダルくて、自分にあるモノを全て放棄してしまいたくなる。
「ドラマ主演？　……って、なに、大河？　ホラー？　刑事物？」
仕事はたまに休みが入るくらい。夏風邪でも引きたいと思ったけれど、思えば思うほど願いとは程遠くなってくる。　この業界に入ってしまったのを後悔した事は何度もあったけれど、俺は本当の願いも、約束も、いまだ果たしてはいない。
「は、恋愛？　断るに決まってんだろ」
「そう言うなって、な？　お前の株も上がるぞ？」
「……前もそれで２時間ＳＰのやって、相手方となんか変な誤報道されたじゃねぇかよ」
「あれは本当に誤解だって、ちゃんと相手もプロダクションもこっちだって言っただろ？　２度も同じ事にはならねぇから、大丈夫だって！　な？」
「……」
この業界、……基、『芸能界』と言われる所に入って４年が経った。慣れないお世辞や隠ぺい工作、やらせやスキャンダル。華の世界と呼ばれる中で、いろいろと見たくないものを見てしまった俺はもう、ここにどっぷり浸かってしまった。
あの昔、部活から帰ってきてはＴＶを付けて好きなバラエティやドラマ、暇潰しに見ていたブラウン管の中身に、俺は今そこにいた。別に入りたいから入ったわけじゃない。第一こういうものには興味

も糞もなかった程だし。じゃあなんで入ったのかと聞かれれば、ある人生の転機と、恋と答える他ない。
「まぁ仕事だしなぁ……。良い。分かった。やる、……で、どんな内容？」
　Kテレビの控室の中、大きな鏡の前の椅子に座りながら、漫画雑誌を読み、スタンバイ待ちをしていた俺に、マネージャーがいきなりテレビドラマの話しを持ち出した。
「学園恋愛。少し中の悪い先輩後輩男女の、恋物語」
「なんだそれ……臭ぇ…」
　ドラマには脇役から主演まで、引っ張りダコだった。刑事モノじゃ新米刑事から始まって、犯人役、殺される側。ホラーは主演から、結局殺される約、大河もそんな感じだ。その他にもいろいろとやっているが、一番苦手なのが恋愛モノだった。別に相手役の女とキスするのが嫌なわけじゃない。仕事だ、ちゃんとわきまえている。じゃあ何で嫌いなのかと聞かれれば、単に恋愛モノが嫌いだから。としか答えられなくなってしまう。
「これ、原作な。ちゃんと読んどけよ。脚本も出来る限り原作に沿うそうだし」
「へー……珍しいな。最近じゃ原作の趣旨も方向も無視してんのばっかなのに」
　マネージャーから手渡された本は思いの他分厚くて、嫌々開いてみた本の中身はしっかりとしまくっていて、携帯小説なんかじゃない事に気づいた。
「市川有紗（いちかわありさ）？　しらねぇな……なんか賞とってたっけ？」
　作者は役者の俺さえも知らない名前だった。新人とは言っても、いきなりドラマ化。少しくらい噂は耳にするだろう。
「あー、…なんかな、その人、今海外居るらしいぞ」
「は？」
「話しだと、海外からこっちの出版社にいきなりその原文が届いたみたいでな、その担当も編集長も顔は知らないらしい。それでも面

白いってな、いきなり出版、そんでもう賞取るのも確実らしい」
どんな映画だよ……。これが天才って奴か、恵まれた奴って言うのか……。
また適当にめくったページには、何やらゾロゾロと書き連ねられた文字がグルグルと描かれていて、読む気すらしなくなってくる。
「ザキさん、これ読み終わったらあらすじ教えて」
「またかお前……少しは本くらい読め！」
「だってなー……」
昔から学校の教科書文さえ読むのが苦痛だった程だ。原作が漫画ならそれはもう読みまくるけれど、俺に小説はきつすぎる。
「お前、もう23だろ。少しはしっかりしろよなー」
「仕事はちゃんとしてるだろ」
「仕事、わな」
「……」
志半ば、推薦入学で入った全寮制の高校を途中退学した後はもう、むちゃくちゃだった。いろいろな指導をされ、教育され、今思えば、あの時の俺は本当に子供（ガキ）だったな、なんて、後悔さえしてきた。
そう、子供だった。
俺も、あいつも。

プロローグ8

「ナツさん！　スタンバイお願いします！」
「はい……ヨロシクお願いしますっ」
大きな楽屋の扉をコンコンと叩き、ラフな格好をした新米ＡＤが俺をさん付けで呼びに来た。俺もそれにＴＶ用の笑顔で答え、楽屋を後にした。
今日、初めの仕事。ドラマの撮影ではなく、バラエティのメインゲスト出演。有名なお笑い芸人が司会の、緩いゴールデン番組だ。進行順番は台本を少しだけ見た、なので結構曖昧なのだが、この番組はアドリブ満載だらけらしいので、台本も無意味らしい。それに、カンペや流れを色々見ればいつも大丈夫だったので、今日だってそれは変わらないだろう。
司会の芸人２人には早々に挨拶をした。まさか携帯の写メでツーショットを撮りたいなどと言われた事は予想外だったが、初対面にしては好印象を持ってくれたかもしれない。
番組のスタジオに入り、ディレクター初め、カメラマンから美術さん、近くに居る人に大きな声で挨拶をした。
「今日は、よろしくお願いします」
「よろしく！　ばっちりイケメンに取ってやるから！」
「ホントですか？　よろしくお願いします、……ははっ」
ここはお世辞の沼。無い事だって有る事のように話せる技術を身に着けなければやっていけない。いかに画面に映れるか、どれだけ笑いの取れる、印象深い発言を出来るか。それよりもまず、味方だ。大きな味方を付ければ付ける程、チャンスが得られる。そのチャンスを得る為には、やっぱり嘘も必要だと言う事だ。
「収録開始しまーす！」
薄暗い舞台脇で合図を待っていると、大きな若い声が聞こえた。さっきの新米ＡＤだろうか。２、３０人程居る客席は、やっぱり女

ばかり。そうため息を吐いている間に、収録開始のカウントダウンが始まっていた。
「5、4、3、2」
1の合図は無い、0と同時に手を大きく振り、それが収録開始の合図だ。番組専用のBGMがかかり、少しだけ間が空き司会の声が聞こえた。最初に軽い笑いを取るような司会達だけのトーク。
3，4分待った辺りだろうか。
「さて、じゃ早速ゲストを紹介しましょうかね」
俺の出番。
ここは俺にとっても、ドラマのようなモノだった。バラエティ然り、映画然り、芸能界然り。自分を隠し、裏の顔を出し続ける。
やっぱりお決まりのBGM。俺が居る目の前の扉の向こう側では、ドライアイスの霧が噴射されているのか、歓声とはまたちょっと違う音が耳を塞いだ。ガシャンと乱暴に開いた自動の扉。眩しい光が俺を照らす。沢山の人、カメラ。全体がこぞって俺を見やがった。
気持ち悪くて、吐きそうになった。
だから、俺はその沢山の期待に添えてやるように、一例した後に、大きく大げさにドヤ顔をしてやった。
あぁ、本当にもう――。

プロローグ9

職業、芸能人。俳優、タレント。所属事務所、西岡ｅｎｔｅｒｔａｉｎｅｒｅｎｔｅｒｐｒｉｓｅ。芸名、ナツ。本名、竹中　棗。特技、弓道。趣味、漫画雑誌を読む事。好きな事、寝る事。嫌いな事、勉強。芸能界に入った理由、知人との約束と、夢を叶える為。一言ＰＲ、よろしくお願いします！

＊

バラエティ収録後、その後は月9と映画の芝居が2つと、芝居の練習時間が与えられるだけだった。事務所の中にある、防音室の中。深夜なので、やっぱり中には誰にもいない。俺のマネージャーのザキさんも、俺が芝居の練習をする時は目の前にはいない。気を使ってくれているのか、ただ自分の仕事があるだけなのか。どっちかと聞かれれば、まぁどっちもなのだろうが。いつも助かっている。

「『大変ですね。お互い気を付けましょう。……色々と』」

棒読みで自分の役の台詞を読み流していく。どうでもいいから文を読み、覚えろと、そう教わったので、これは昔からの事だ。

「『はぁ、僕が犯人だと、…。そんなのは憶測。机上の空論でしかないですよ』」

サスペンスミステリーの謎の鍵を握る男の役。こういうような役は大抵楽だった。心を込めない部分は、何も思わずに台詞を口にすればいいだけだ。何を考えているか分からないような顔をして、魚みたいな死んでる目を作って。それでも、終盤の見せ場で人間味を出す。ただそれだけ。至って簡単で、単純な役。それよりも難しいのが、恋愛モノだ。どう表現すればいいか分からない。

「『それでは、私はここで。次会うときも、またお元気な顔が拝見出来ると願ってますよ』」

俺と相手役の誤報道が起きた時の2時間ＳＰの恋愛モノだって、その時は相手を壱だと思ってやった。演じてみた。

『お前の泣く顔は見たくない。悲しくなんてさせたくもない。俺は、お前を守りたい』

相手は、泣いて喜んで、それから笑った。

心臓が止まりそうになってしまった。思考が停止する。そこからの台詞がどうやって口から出てきたのかは分からない。最後にカット、と、大きな声が聞こえて、ハッと意識が戻った。

その時思った。

壱は、喜んだだろうか。……喜ぶ？　喜ぶ筈がない。相手はどうだ、女だ。そりゃそうだ。自分が好きだと言った男からそんな事言われれば、それは嬉しいだろう。でもそれなら、俺がやっていた事は間違いだった。

壱は男で、女じゃない。

嬉しい筈もない。喜ぶ筈もない。

「…高居、コートに入っている携帯が鳴る。携帯画面の着信先を見て、嬉しそうに……」

恋愛モノは苦手で、やりづらい。それでも仕事は仕事で、ザキさんの話しをオーケーしてしまったが、実際のところ、俺はどうすればいいんだろうか。承諾してしまった以上、仕事事態がボツにならない限りは、やるしかない。

女の恋愛は知らない。俺は実際壱との間でしか恋と言うモノを知っていなくて。

芝居で悩んでいる中。

「ナァーツーっ！」

女の声。

俺の芸名を付けたやつが、防音室の部屋の扉を乱暴に開けた。

プロローグ10

「お前……またか、ビックリさせんなってのっ！」
乱暴に開かれた扉の方向を、目を見開きながら凝視した。重たい筈の扉は全開で、その扉の真ん中に、茶髪の髪の毛を左側に纏めて縛った女が仁王立ちで立っている。短いミニスカートにTシャツ。ラフな格好にしては妙にオシャレだといつも思う。俺がいつか『プレゼント』みたいな感じに買ってやった輪っかの腕輪も付けている。
「ナツー！　ドラマ出演ケッテーしたっ！」
「へー、……あっそ」
「…何それ、すっごいKY。役者でしょー？」
嘘でも良いから、一緒に喜べと。出会った当時はこんな自己中心的な性格ではなかった筈なのに。徐々に変わっていったそれに、最初は付き合ってはいなかったが、面倒臭いので、いつも大げさに祝ってやっていた。
「『お、やったなぁ！　俺も嬉しいぞ！』」
口ぶりだけはテンション高く、鏡から見えるその声を出している顔は、何の心も籠っていない。
「でしょー！　最近ちょくちょく脇役だったけど、ちゃんと役名付いてんだよ！」
「……殺され役？　どーせチョイ役だろ？」
「昔のナツじゃないんだから」
「……おまっ…」
この世界に入って、やっと、ようやく入った仕事だった。開始時間3、4分で殺される、名も無い役。初めの仕事がそんなのなんて、……とか、思ったりもして沈んだ時期もあったが、今思ってみれば、みんな最初は顔が映るかも分からない通行人やら、そんな俺よりも沈みそうな所から始まっている。それに比べりゃ、俺はなんて幸せな所からスタート出来たんだと、自分の運を喜んだ。

みんなと違って、顔面蒼白、血塗られた特殊メイクを施された顔が、画面上にアップで映ったんだから。
「おまえなー……」
それでも、沈むモンは沈むモノで、それは今でも変わらない。
「あー、……じゃ、…何なの、なんのドラマ？」
「ピュアラブドラマ！」
純愛ドラマだと。何がそんなに嬉しいのか、俺にはよく理解出来なかった。
「へぇ、偶然。俺も、……ピュアラブドラマ出演決定したばかりだ」
「ほんとにー？　もしかして一緒かなっ？！」
「まさかだろ、……恋愛ドラマって最近たくさんあるだろ。てか、ありすぎ」
「確かねー、作者が『市川有紗』って人」
「は……」
本当は俺が思うほど、恋愛ドラマなんて無いのかもしれない。それかもしかして、思うほど芸能界も狭いとか。
「あー…そんで、何の役？」
「ヒロインのお友達……？　みたいな」
本当にチョイ役を貰ったなと、そう思った。恋敵になるわけでも無し。三角関係になるわけでもないし。
「なぁコレ、原作読んだ？」
「原作は――読んでないけど」
自分が持ってきた手提げ鞄の中から、纏まった紙の束を取り出した。
「これ、さっきナズからもらったの。台本」
手渡されたその１番上の紙には、ゴシック体で大きく、『Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ』なんて書かれてあった。題名までくさすぎて、反吐さえでそうな気がしてくる。それでも何か、懐かしみのある言葉。顔を顰めながらパラッと適当に紙をめくってみると、台詞や場面展開が事細かく記されている。

「はぁ……俺も明日辺り、これと同じモン渡されんのかね…」
1話目からいろいろと、何やら女子高生がトキメイてしまいそうな台詞や場面が多々あった。コレを俺が演じきれるのか、もしかして出来なすぎて1話目で途中降板とかあるかもしれないとか。変な恐怖がわなわなと溢れてくる。
「やっぱり同じドラマなんじゃん！」
「同じドラマでも、叶(かな)よりはいい役もらったけどな」
「え、……なになに？」
恐怖を払うように、俺は嫌々した顔で叶を挑発するように言ってやった。
「主役」
あぁ、本当にもう――。

プロローグ11

次の日。眠気覚ましにニュースを付けていると、やっぱり今日も気象予報は暑いらしい。今日は少し話しがあるからと、朝早くの涼しい時間帯に起こされた。ニュースを見ながらのんびり水を飲んで居ると、さっさとしろとザキさんに叩かれ、しぶしぶ事務所へと向かった。

「昨日山崎から言われて分かったと思うけど、恋愛ドラマ。原作読んだ？」

「いや……」

「読んでないのね」

立派な絵画や装飾植物。色々部屋や人物を見立てる為に置かれただけの装飾品が、社長椅子に座るコイツを立派に見立てている。

「社長からもなんか言ってやってくださいよ。コイツ台本以外の文章全然読まなくて…」

呆れた声で少し後ろからザキさんの声が聞こえた。でもそれはいつもの事だし、俺は黙って椅子に座るそいつを見ていた。

「台本は？　叶にはもう渡ってんだろ」

「あら、もう知ってんの」

「昨日会ったからな」

ふーんと、頬杖を付きながら嘆息した。それからこれまた立派な机の引き出しから、叶と同じ、紙の束を取り出した。一番上の紙には、やっぱり『Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ』の文字。

俺は顔を顰めた。

「嫌そうな顔ね」

「恋愛モノがな。何で通すかね、お前もザキさんも」

「仕事だからでしょ。他に何があるのよ」

「……」

そりゃそうだと、俺は溜息を吐いた。俺もコイツも、根っこで思

っている事は同じ。
「まぁでも、原作はちゃんと読んどいた方があんたの為かもしれないよ」
「社長直々に……ご苦労さま」
「ちゃんと聞きなさい。これはあんたにとって、チャンスなのよ」
なんのチャンス何だと、俺は目の前のそいつを凝視した。
「私があんたにあげる、最後のチャンスよ」
その言葉が、妙に頭に残った。
それはもしかして、この仕事が出来なければ芸能界を引退させられるとか、そういう事なのだろうか。……自分から俺をこの世界に監禁させておいて？
「芸能界とか、そういう話しじゃなくて――」
「……？」
「昔の賭け勝負の、続き」
「賭け……？」
一体何のことだろうか。頭を巡らせて思い出しては見るが、思い当たるふしは多々ある。
「あんたの分からない事をいちいち教えてる程暇じゃないの。原作はそのヒント。同時にあんたの演技の為にもなるわ」
曖昧な発言。意味不明なコイツは、そういえば元からそんな感じだった。俺より何倍も賢くて、頭が良く回る。
昔からだ。
頭の良い奴の考えていることは良く分からない。
「薺（なずな）……」
「早く行きなさい。今日も、みっちり仕事あるんだから」
その時、薺が苦しそうに笑ったその意図は、分からない。

夢

カタカタと音を立てるキーボードは、3時を知らす時計の音と共に止んだ。パソコン画面をじっと見ていて疲れ切ってしまった目の端を指でくいっと引き上げ、それから腕を天井目掛け伸ばしてみる。背中が少しだけコキコキとなって、予想以上に痛かった。

「終わったー……」

そう小さく歓喜の声を漏らし、上にあげた手をガッツポーズにした。

明に俺の恥ずかしい小説を日本に送られ、それから何故か評価され、出版社にデビュースカウトみたいな事をされ、既にもうすぐ半年が過ぎようとしていた。

俺は院には行かず卒業、それから今日まで飲食店でバイト生活をしていた。出版社から届いたあの書類が母さんに見つかり、その見つかった日に父さんにまでばれた。普通に拒否されると思ったし、何故か怒られるとも思い身を引き締めていた俺に向かって放った父さんの言葉は、俺を力いっぱい脱力させた。

「凄いなー、壱は。ま、頑張れよ!」

まさかそんな他人事のように言われるとは思わなかった。父さんにだって考えている事くらいあるのだろうが、親ならばこんな不安定な道、絶対に止めろと言うと思っていた。それに、正直少しくらい止めて欲しかった。止めてくれれば、俺はすぐにその話しを断って、大学院に行くか、普通のサラリーマン生活をしていた事だろう。

誰にも否定されない、自分でその話しを断ったって、やりたい事だってない。それなので、俺はすぐに出版社と連絡を取り合った。断りの連絡ではなく。

「……腹減った」

次に来た通知は、直筆の手紙と、メールアドレスだった。電話じゃ金が掛かるからと、担当のメール連絡先。最初はこんな上手い話

し、詐欺かなとか、そんな事を思っていたが、連絡を取り合っているウチにそうではないと分かった。
実際、文章の書き方やら、構成の事やら、いろいろな事を指摘してくれていた。成長も目に見えて上達したし、楽しさだってわかった。それから今まで、そのたった1つの原文を直す事だけをしてきた。たまにテストがてら短編を書かされたりもしたが、まぁ大体はその原文直し。面倒臭いし、結構面白くもなかった。
やっと完成したその小説。最初に比べてみれば8割以上に立派になった。
出来たそれを厳重に2度程保存し、それからUSBに写し、その原文もコピー印刷をした。
「さっさと送んなきゃな……」
封筒にまたまた厳重にそのUSBと印刷した紙を入れ、のりで封をしてからその上からテーピングまでした。国際便で送って、届くのは4，5日後だろう。行きでそれくらい、届いたらメールが来る。いつもいつもその繰り返し。
国を跨いでいる分、やりとりは少しばかり窮屈で難しいものだった。
俺の背中を押してくれている人達には申し訳無いけれど、俺は本当に本が出るなんて思ってはいない。だってそんな夢みたいな話しがあるわけないし、じゃあ何でこんな事を続けているのかと聞かれれば、純粋に嬉しいからだった。
文を書いて送る。返って来た返事は注意点とアドバイス。それを踏まえて直して再度直した文を送る。返ってくる返事は注意とアドバイスと、褒め言葉。
その褒め言葉が嬉しくて、楽しくて、だから俺はその為に頑張っていた。
俺の文が出版されるなんて、そんな事頭の端にさえ入ってはいなかった。
そんな夢みたいな事、あるわけがないし。

そんな夢みたいな――。

「……」

『本を出版する準備を進めています』

頭に思い描いていない夢ほど叶いやすいって事を、俺はまだ、迷信だと信じて止まなかった。

勝手

「すげぇじゃん壱！　お前ホントにすげーなぁ！」
いきなり抱きつかれた体が異常に苦しい。抱きついた相手の背中をバンバン叩きながら、愛想笑いで返した。
「ははは……いや、そかな…」
「なに？　あんま嬉しくねぇ？」
完成した小説を国際便で出版社に送った。４，５日後、バイトから帰ってきてＰＣを付けると、いつも通り出版社からメールが１通届いていた。その中の文の中の１行に、『本を出す準備を進めている』と、そう書いてあったと、明に伝えた。
まるで自分の事かのように喜ぶ明の目の前の、妙にテンションの低い俺に気づいたのか、高い場所にある頭を俺の顔の高さまで傾けた。なんで？　ときょとんとした顔は、本当に不思議そうに俺を覗いていて、少しだけ困ってしまった。
「んー…いや嬉しいっちゃ嬉しいけどさ。そういう事考えないで書き直してたから」
突然のことで、喜んで良いのか悪いのか。
「は？　じゃ何で書いてたの」
誰が聞いたって、それが素朴な疑問なのだろう。本当の事は恥ずかしくてあんまり言いたくなかったけれど、でも他に答えが無い。
「褒められるの、……嬉しかったし」
頬を人差し指でぽりぽりと掻きながら、目線を逸らして小さな声で呟いた。きっと馬鹿にされるんだろうなと、心の中でため息を吐く。
「……なんつーか、壱さー」
「ん？」
そうして言おうか言うまいか迷いながら返ってきた言葉。
「欲ってのが、少ねぇよな」

「は？」
返ってきた言葉は想像も付かなかった事で、俺は少しだけあんぐりした。何を言うかと思えば……。
「欲しいモノとかは、…あるけど。」
「何？」
「んー？　……んー…、あ。ジーンズ。最近傷んできたから」
履いていたジーンズは膝の部分からチョロチョロと紐が垂れていた。切っても切ってもチョロチョロ出てくるし、いっその事擦切らしてオシャレにでもしてみようかと思ったけれど、アレは膝だけが外気でスースーしてあまり好きじゃない。
膝部分を引っ張りながらそう言うと、明の顔が渋って行くのが分かった。
「……やっぱ、無ぇの」
自分から降っといて、…だから、いきなり何なんだと。
「こういうのはバンバン取って行かないと、後悔するぞ」
「こういうの？」
「自分の目の前にある、チャンス」
「……」
つまりは、これは俺にとってのチャンスだと、そう言いたいのだろうか。わざわざ俺が上げたチャンスなんだから、大事に使えと、そう偉そうに言われてる気もしたけれど、そんな事コイツは考えてもいないのだろう。
「このチャンス、もし失敗したらどうすんだよ？　俺、もう社会人なのに」
「良いトコの大学出てんだから大丈夫だっての。少しくらい人生休め。……今って、その期間じゃね？」
「休日に、……どれくらい年数掛けるつもりだよ…」
「んー…もういーやってくらい？」
「そんな勝手な……」
勝手でオーケーだと、明が笑った。

イチカワ　アリサ

「そーと決まれば、作者名だなー」
「あぁ……それ、担当さんにも言われた」
作者名でも、別に本名を名乗っても大丈夫なんじゃないかと心の奥底で思ったんだが、そういうのはあまり良い事でもないらしい。自然に、且つ印象に残るような。そんな条件を叩きつけられて、俺はそこでもう挫けてしまいそうだった。
「ストロングマンとかどう？　強くね？」
ネーミングセンスの無さに愕然とした。
「そのまんまじゃねぇか」
「インパクトあったほうが覚えてもらえない？」
「それじゃありすぎてドン引きされるって。日本の昭和の戦隊モノってそんな感じだったよなー」
「あー分かるかもしんねぇそれっ！　懐かしいなー。…え、てかそうかなー。俺は良いと思うんですけど」
「お前がよくても、そりゃダメじゃねぇの」
ていうか書いた話しの内容は恋愛モノだってのに、作者の名前がストロングマンじゃ買ってくれる人もきっとスルーしてしまうだろう。じゃあ、どんな名前がいいんだろうか。
よく苗字の部分が平仮名で下の名前が漢字ってのもあるけれど、俺はあまり好きじゃなかった。作者名としては凄くそれっぽいのだが、いまいちピンと来ない。
「あ、良い事思いついた！」
「んー？」
ネーミングセンスの無さはストロングマンで充分に理解した。良い事思いついたと言う言葉に軽く返事をして、俺は天井を覗いていた。
「女みたいな名前にしちゃえば？」

「ん？」
「んー……例えば、『有沢　壱』だから、壱子とか」
イチコ……？
「俺は明だから、明子とか」
アキコ？
「よくね？」
女の子みたいな名前にしてしまうって言う案は凄く良いと思ったのだが、……壱子とか、明子って、それは捻りが普通すぎるような気もそうでもないような感じも…。
「あ、じゃあ。『有沢』だから、『ありさ』とか」
「ありさ、…かぁ」
なんか、普通に可愛いし良いような気もしてきた。自然な名前。……印象はあまり残せないかもしれないけれど、それは俺の書く話しの内容で変えていけばいい。
恋愛モノを書いた。読者層は女性の、１０代から２０代前半くらいだろうか。そんな人達が気軽に本を手に取れるような名前。
「良いなー」
心の底から気に入っていた。
「苗字はどうすんの？　つける？」
「んー…付けなくても良いような気もするけど、……つけた方が綺麗に纏まった感じしない？」
そういう所ホント真面目だなーと、クスクス笑われた。
「当たり前だろー」
そう、当たり前。昔からそれが俺の普通だったから、そこはもう変わらない。
「苗字の部分に名前使ったから、逆に名前の部分苗字にしよーぜ」
何か楽しそうに明が笑った。
「『イチノセ』とかどうよ？」
「んー…なんかありきたりな気がしてきた。かっこいーんだけどさ。もっとこう……一般市民にもちょくちょく付きそーな…」

「いち……いちー。イチサワ…なんか微妙……あ！　…『イチカワ』！　俺が日本に居た時、小学校の同じクラスにイチカワっていた！」
イチカワ　アリサ。
「なんか、…よくね？」
「だろ？」
ストロングマンより１０倍マシだとそう明が言ったので、俺はその横顔を見て笑ってやった。
「１００倍マシだって」

決着　1

少しの確率で良いのです。
いつしかこれを手に取る時を信じて。
＊
「出版は来月3日の予定です」
いつものやりとりメール。いつどの角度からその文を見たって、いよいよだった。
それでも緊張での胸の高鳴りなんかあの日から1回も無く。
「ありがとうございます……っと」
まさか、こんな事になるとは思わなかった。あの文は１００％、人の明るみに出ないままいつか削除すると思っていたし、それが本来なら当然の事なのだろう。そんなクリック1回で消してしまえる文が、クリック1回では消せなくなる。怖いような、嬉しいような。
それでも、そんな些細なモノが人に見てもらえるのなら、俺はそんな幸福を多いに喜ぶべきだと思う。
後悔しないように、精一杯書いてやろう。
「でもあれはやりすぎたかなー……」
後悔しないようにと言っておきながら、早々と後悔してみた。大きなため息を吐き、机につっぷする。まぁでも、こんな後悔だって後の祭り。今日はもう今月の末で、後4，5日すれば来月の3日がやってくる。出版予定がそれなのだから、もう印刷だって全て終わっているのだろう。『やっぱり変えたい』なんて、そんなわがままま言えないし、……後悔したからといってそんな事言うつもりもない。
ただ少し。
「ブリ返すだけ……？」
あの日の『決着』を付ける為に書いただけの事。約束か、願いか。あいつはあの時自分から俺に言った事を、俺の事を、もう忘れていると思う。ちゃんとした彼女がいるのかもしれない。幸せな家庭を

築いているのかもしれない。
それでいい。振り替えらなくていい。少し、ただ少しだけコレ見て思い出す程度。悪い思い出で良い。あれ？　なんて疑問に思う程度でも良い。
ちゃんと、あの日と『お別れ』出来ればそれでいい。それだけだ。だって、中途半端は俺の辞書には反している。何事にもきっちりとやるのが俺の理で。
せっかく明からもらったチャンスなんだ。自分の努力で道を切り開いて見たんだ。目の前にあるチャンス。上手く使わなくちゃ大損だ。
顔も合わさない。言葉も交わさない。もしかしてあいつはこんなモノ読まないのかもしれない。確率は低い。それでもいい。俺の中で決着を付けれれば、いつかは俺の知らない間に、静かに消滅してくれるだろう。
その時を待って。
そうすれば俺は、あいつの事だって、エマの事だって。きっと忘れられる。
前に向かって、進んで、進んで。

嵐の前の

本が出版された。多分店頭に出されたのは俺が大学で授業を受けている間だろう。実感はやっぱり湧かなくて、頭が少しだけフワフワした気分。

本を出してから次に出版社から連絡が来たのは、それから1週間後の事だった。ウィークリーランキングの結果報告らしい。結果はいわずもがな圏外。まぁ当たり前の事だろうとは思ったが、心の中は何かモヤモヤした感じでいっぱいだった。悔しいって事だろう。

それからは2週間目も圏外で、その次も圏外だった。

やっぱ無理なんじゃねぇ？　なんて、そんな事を俺も出版社も明なんかも思っていた時に、それは変化した。嵐の前の静けさ。なんて言葉が似合うんじゃないの？　なんて、上手い事を誰かに言われた気もする。

「4週目にしてランクインだぞ！」

98位。

あれれ、と少し考えてみる。果たしてこの数字は凄いのか普通なのか悪いのか。別にこんな順位を叩き出しても『嵐の前の静けさ』なんて言えないだろ。

「5週目56位だ！」

うん？　前回よりはかなり上がっているけど、これだってあまり大した数字じゃないんじゃないのだろうか。確かにすっごい上がったのはかなり嬉しいけれども……。

「21位だぞ！」

嵐の前の静けさ？

「19位！」

「15位！」

「7位！　トップ10入りしたぞっ」

誰かが上手い事を言った通り、あれは嵐の前の静けさと言われる

ような感じのモノだった。今はちょうど嵐が上陸した頃だろう。
出版社が言うには、ちょくちょくテレビで放送されるし、取材の電話もかかってくるらしい。やっぱり『正体不明の海外住み』ってのがかなり大きいっぽい。
「この調子で次もよろしく！」
なーんて言われた俺は、かなり舞い上がっていたと思う。圏外の時に心がモヤモヤした。だけど今はどうだ、高揚感。達成感。そして疾走感。俺はこの世界でやってくだけの力があるんじゃないんだろうか。
そんな事をただ考えて、そして明るいＰＣ画面の前でキーボードをひたすら叩いた。
構成を練って、それをノートに書き写し、場面転換。そこまで綿密に仕上げて、それからストーリーを書いていく。
「次は一気に変わりましたね、……うん、これは良いと思います。構成もちゃんとしている」
もしかして本当に、俺はこれで食っていけるんじゃないか、とか。
「そういえば、上が先生の小説のドラマ化や映画化のオファーが来てるだとか、……そんな噂をしていましたね」
もしかして本当に、俺はいろんな人に評価してもらえるようになるんじゃないか、とか。
「それで、あの。……こちらに戻ってくる、って事を、少し考えてみてはくれないでしょうか？」
「帰国……ですか？」
「はい。こうやって喋ったり、メールしたり。そういうのではなく、直接会ってやっていった方が、お互いの時間も都合も、原稿だって、スムーズに進むと思うんです」
その通りだった。
俺には大学があり、向こうには仕事がある。喋る時間は限られていて、さらに追い詰めるかのような時差があり。原稿の確認があり。
やっぱりその点に関して言えば、国を跨ぐやり方はやりづらい。

「考えてみます」
もしかして本当にこれで生きていけるんだとすればの、そんな話し。

賭け勝負

『昔の賭け勝負の、続き』

薺のあの言葉が、妙に引っかかった。俺はアイツと何か、今に続くような賭けをしただろうか。賭けはもう何度としている。芸能界に入ってからは多々ある。それこそ、『数えきれない程』その中で賭けの続きと言われても、何が何やら分からない。

俺は昔から頭が悪い。一応大学には行ったが、それはアクマでプロフィールを少しでも良く見せる為。『大学』と言う文字が付けば、『高校』で終了している学歴よりは見栄えがいいだろう。勿論行った大学は三流大学だが、……それでもまぁ大学は大学だ。

そんな俺がいちいち賭けを覚えれるわけもなく。

いくら考えたって分からないモノは分からない。それより大事なのは目の前の仕事なわけで、俺は静かにドラマの台本を開いてみた。俳優てのは、台詞覚えねぇと話しにならない仕事。

ヅラッと並んだ各々の台詞と、進行文。

「こういう暗記だけは出来んだけどな」

終わったらすぐ忘れるが。でもそれは良い事だと、いつか薺に言われた事があった。それは褒め言葉らしかったけれど、俺は余り喜ぶ事も出来なかった。

薺の顔を浮かび上がせながら台本をペラペラとめくっていると、ドアの向こう側からコンコンと音が聞こえるのが分かった。

「どうぞ」

一応相槌を打ってドアを見ていると、そこからザキさんが顔を出した。

「なんだザキさんか。何？」

「棗、これから打ち合わせだ、こないだの、『Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ』のスタッフとキャストの顔合わせも兼ねてる」

「あぁ。そいえばさっき言ってたな。……分かった、今行く」

パタンと台本を閉じると、自然に浮かび上がった薺の顔もどこかに弾けてしまった。台本を鞄の中へ入れて、深く帽子を被って、色の濃いサングラスをかける。
「車回すから、裏で待っててくれ」
「わかった」
芸能人てのは少しでもＴＶで顔を出すようになれば色々大変だと、最初の頃ザキさんには言われていた。その通りだと気付くのは結構前だったような気もするが、今でもうんざりしていた。好きなところに好きな時に行けないし、一般人でも無いから顔だって隠さなきゃいけない。
一言で『大変』だった。
それでも良い事だってある。普段は入れないような高級レストランとか、遊園地だって撮影で無料で入れたりするし、撮影後の食べ物飲み物だってくれたりする。
ようは金が浮く、みたいな感じだが。
「お待たせ、早く乗れ」
それでも多忙で溜まった金なんか使えもしねぇ。
毎日毎日会うのは新しく見る初対面の人ばっかで顔だって覚えているか危うい。2，3回会ったってすぐ忘れるし、名前なんかも覚えられない。芸能界歴長いような大御所ならそれならそれでいいと思うが、俺はまだ2，3年そこらの新人でしかない。スタッフには挨拶、礼儀は大切で、1回会ったのに『初めまして』は最大の失敗だ。
肩こるし、だから疲れる。
「ニコテレだっけ、オンエアされんの」
「そ、日国（にっこく）テレビ。今日もそこの会議室でやるそうだ」
「こんな恰好で大丈夫だったか？」
パーカーとジーパンのいつもよりは凄くラフな格好だった。
「大丈夫、今日は撮影前の挨拶交流と意見要望交換程度だからな。ピシっとするところでも無いよ」

それなら大丈夫か、と、サイドミラーで自分の顔を1度だけ見てみた。
「あぁそうだ、お前主演ヒロインの話し聞いたか？」
「いや、……どんな奴だ？」
『ヒロイン』の言葉には少しだけトラウマ、……みたいなモノが会った。こないだの恋愛ドラマの誤報道以来だ。
「シャークエージェンシーの子らしい。オーディションでぴったりはまったんだと」
「は？　オーディション？　俺そんなんやってねぇぞ」
もしかして叶もオーディションを受けて受かったのか？　それだったら、あの決まった決まった言ってた時のハイテンションさも分からなくはないが。
「撮影監督と脚本の推しだそうだ。即決だとさ」
まるで自分の事のように嬉しそうな声を出してザキさんが言った。
「こればかりは推されてもなぁ……」
恋愛は苦手だから。
「さ、ついたついた。早く行くぞ」
ニコテレの地下、駐車場。薄暗く電気が灯るそこで、俺は車のドアを開けた。

鮫エージェンシー　1

正面入り口から入って少しばかり先に受付と、そこからもっと先に入館通路が見えた。

少し待ってろとザキさんが俺から離れ、受付へと向かう。そこに入る女に笑顔で話し、それから女は話しに頷いたかのように紐の掛かった入館証を2つ取り出した。笑顔で手を軽く上げ、それから俺の元にザキさんが戻ってくる。

「さ、行こうか」

つくづく思うが。

「アンタも向いてると思うけどな、芸能」

「ん？　なに？」

「なんでもね、行こうぜ」

その笑顔、少しキラキラ眩しいって。

そんな事を片隅で思いながら、俺はザキさんから俺の名前の入った入館証を受け取った。そしてそのまま入館通路へと向かう。電車や地下鉄に乗る前の、買った切ってを入れる機会みたいなところだった。慣れた手つきで入館証をそこにかざし、認証したようにかざしたそこが青く光る、そのまま通路を妨げたバーがガチャンと左右に開き、難なく中へと入れた。

最初こそどうやるか手間取った所だった。何気に格好いいだとか、もう芸能人のくせに『芸能人みてぇ！』だとか思っていた俺を、時々だけど思い出した。

「１０階のＪ－５会議室だ、早く行くぞ」

所々見知った顔のプロデューサーだとか、ＡＤだとかと居合わせし、挨拶をして軽く会話を交えたりもした。こういう些細な礼儀だって忘れてはいけない世界だった。ここ気を抜けば一気に蹴落とされる世界で、次に繋げる為には必要不可欠な毎日恒例行事。

「確か叶は一人でもう先に行ってたな」

「あいつ行動だけは素早いな」
「あの子はまだマネージャーがいない分自分で行動しなきゃ行けないからな」
努力家って事でも、それは大抵プラスに加算される。俺は入って早々にザキさんをマネージャーを付けてもらった。薺の芸能プロダクションが開いて初めの人間だったからもあるだろうけれど、絶対にヒイキと言われるものだろう。
「失礼します」
１０階。Ｊ‐５会議室。帽子とサングラスを外してザキさんに渡し身を整えると、ザキさんが扉をコンコンと叩いて開いた。
明るい蛍光灯の下。さすがにスタッフとキャストが揃うという事で、会議室は異様にデカかった。
「失礼します、遅くなってすみませんでした。ナツと言います。よろしくお願いします」
少しばかり大きな声で扉前で頭を軽く下げ、それから空いている席にザキさんに促されて、そこに座った。隣で先に早く来た叶がこちらを見て笑った。
「ナツ、ワクワクするね」
ワクワクしてんのはお前だけだ。
「そうだな、ちょっと緊張してる」
とぼけたような、照れたような感じにそう言ってみた。嘘だった。それはきっとザキさんも叶だって気づいている。
俳優だもんな俺は。
俺の言った一言で、近くのスタッフが少しだけ小さく笑っていた。そんな緊張しないで、と女のスタッフが言ったので、眉を引き上げながら『はい』と返答した。
そこでまた扉のドアが開く。
「お、お遅くなりました、シャークエージェンシー、藤原牧（ふじわらまき）ですっ、よろ、よろしくお願いします！」
たどたどしい、何回か言い直しながら、何か必死めな女の子が入

ってきた。叶くらいの年齢だろうか。それに、後ろには黒いスーツを身に纏って、何か偉そうな顔をした男が居る。
「あの後ろの奴、マネージャーか？」
「そうだろうな。……あぁ、棗、あの子がさっき言ってた主演ヒロインだ」
へぇ、……あの子が。
短髪？　じゃないな。セミロングとでも言うくらいの長さのボブヘア。ワンピースに薄いカーディガンを羽織って、ブーツを履いている。
見た感じ清楚系な女の子だった。
――後ろと真逆すぎだろ。

鮫エージェンシー　2

藤原牧。ドラマＩ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ．のオーディションの末主演ヒロインを獲得。まだ新人だろうか、少しやりづらそうにこちらをチラチラと覗いていた。

「おい、なんか見てるぞ」

ザキさんが俺に耳打ちする。

やっぱりだ。見ていると思っていたのは俺だけじゃなかったらしい。その子の視線が先ほどからうるさいくらいに感じられていた。

「おい、勘違いじゃねぇぞ。見てんぞ」

俺はそう呟いて、その熱視線を浴びているそいつをジーッと見た。

「叶」

「分かってるわよ、あの子。私初対面じゃなんだよね。……この前バラエティのゲスト収録があったんだけど、その時あの子も一緒居たの」

熱視線を返すかのようにイライラと牧を睨み続ける叶は、こちらには振り向きもしないで淡々とそう呟く。

「そんで、後ろのアレ。マネージャー。アイツも一緒に居てさ、何か揉めてると思ったら一方的にあの子の行動決めちゃってさ、あーやれこーやれって。仕舞にはあの子が反論したら逆切れしてやんの」

まぁ……そんな顔してやがるな。

「私ムカついて言ったんだよ。『アンタみたいのが若い芽潰してんだ』って。」

うわぁ……。

「そしたらあの子血相掻いたみたいに男の方擁護しはじめて、最後には睨まれたんだよ？　私の正義感返せっての」

「いやそれ、お前の一方的なアレじゃん」

まぁマネージャーもいないタレントのお前からしてみれば、そういう事するマネージャーがやけにイラつくのも分からなくは無い。

スケジュール管理、バックアップの域を越えている部分だってある。でもそれはアクマで他の奴の、他人の話しだ。
無視しとけば自分より這い上がるか気付いたらいなくなってるか、ただそれだけだろう。無駄な正義感は仇になるぞ。
「でも……っ」
「すみません、西岡ｅｎｔｅｒｔａｉｎｅｒ（エンターテイナー）・ｅｎｔｅｒｐｒｉｓｅ（エンタープライズ）の方々ですか？」
噂をすれば、だ。
声をかけてきたのは、その若い芽潰しの偉そうなマネージャーだった。叶は嫌そうな顔を露骨に隠している。バレバレだぞ。
「えぇ、私、西岡エンターの専属マネージャーで『ナツ』のマネージャーをしています、山崎、と言います。……何か？」
「この子、名前はなんでしたっけ？」
指を刺した先は、叶。
「的場叶（まとばかなた）。ウチのタレントですが」
「お宅のタレントさんは一体どんな教育をなされているんですか？」
「「は？」」
叶とザキさんの声が重なって聞こえた。
「こないだの番組収録で、意味も無く切れられ、罵声を浴びせられ。今日は何です。ウチのタレント睨みあげて……どういう事ですかね？」
「あ、あの……メグちゃんっ」
マネージャーの後ろで小さく裾をぐいぐい力無く引っ張り、止めようよと訴える藤原牧を無視し、依然喧嘩腰のその偉そうなマネージャー。
お宅のタレントとこっちのタレントが熱視線交し合ってただけだろう。
言い掛かりっちゃ言い掛かり。だから多分コイツは自分のタレントが他の事務所の子に睨みあげられてるって事に腹を立ててるんじゃない。

前文。意味も無く切れられ、罵声を浴びせられ。
ようは自分がコイツに気分を害された事に切れているのだ。自分のタレントの云々（うんぬん）なんて付録だ。
「鮫（シャーク）エージェンシーさん、それは、本当に申し訳ありませんでした。」
ザキさんがあちら側のマネージャーに深々と頭を下げた。
沢山の人、広い会議室。それまではまだ監督も脚本も、ドラマの最大の骨となる人はいない。全員集まるまでは騒がしいこの屋内も止みそうにはない。
頭を下げても他の奴等は気づきもしなかった。
「――……ですが、叶の話しを聞いている感じでは、そちらのマネジメントにも不手際があったのでは？」
「……んだと？」
低い声と切れ細の目がザキさんを睨みあげた。
余程キレやすい性格らしい。後ろのタレントが震えている。
「マネージャーの仕事の一番はタレントのスケジュール管理。ですがそれと同時に、どうすればタレントがより他より映えるか考えなければいけない。……タレントとマネージャーの、マンツーマンで」
「……」
「一方的強制的と言うのは諮りかねますが」
うんうんと頷く叶の姿と、礼儀良く反抗するザキさんを、俺は交互に見ていた。ていうか、元々お前のせいだろ叶。……いや、でも。俺もこんなマネージャー付けばやる気も無くなるな。
可哀そうに、と、俺は涙目で現状を見つめる藤原牧をチラリと眺めた。

鮫エージェンシー　3

同じマネージャーとしてそんなやり方は許せない。とでも思っているのだろうか。ザキさんは冷静に静かに声を張り上げた。まぁそれはそうだろう、他人事のように聞き流す俺だって良い気はしないのだから。

「ですが、今回の件についてはこちら側に否がありました、本当に申し訳ありません。……ほら、叶」

「う……す、すみませんでした…」

嫌々と、頭を深く下げる叶。そうそう、素直に謝っとけ。

なんて、まるで他人事かのようにその現状を見ていた。話しには何一つ関わっていないし、口を出すつもりもない。俺がわざわざ交じる必要性も無いだろうし、色々ごちゃごちゃになるだろう。

それに、こういうのはもう慣れた。

「あ……んた。ぐっ……いや、まぁいい。これから気を付けろ」

偉そうに。

「ありがとうございます。……あ、そちらのお名前は？」

そういえば、このマネージャー自分の挨拶もまだ無い。それどころか、自分の管理しているタレントを押し出そうともしていない。

おいおい。教育も気をつけんのもお前のが先なんじゃないのか？

「鮫エージェンシー、社長の鮫島勇武の息子、兼、藤原牧のマネージャーをしている。鮫島巡だ」

偉そうなのは本当だった。自分の親父が権力もあり、偉ければ自分だってそうなんだと思い込んでしまう。ようはアレだ、世間知らずの坊っちゃん。

俺の嫌いなタイプ。薺もそうだが、アイツはちょっと違う。アイツには人間を見る目があり、だから今、芸能事務所を経営できている。

「コイツはこんなんだが、父さんは何かとコイツに期待していてね、

余りコイツにちょっかいかけるのは止めてくれ」
「メグちゃんっ。そんな言い方っ」
「お前は黙ってろっつの。友達云々で仕事もろくに出来ないようになられりゃ俺が困るんだよ」
鮫島は相変わらず自分の服の裾を引っ張る藤原をきつく睨みあげた。目に涙が溜まっている。そんなにコイツが怖いんだろうか。
まぁ、そこまで言われてしまえば泣きたくもなるだろうか。
友達が居たら仕事が出来ないとは、一体誰の入れ知恵なんだ。別に俺にだって友達くらいいる。叶とだってしょっちゅう話しているし、他の奴等とも。それでも仕事だってちゃんとやっている。台詞も覚えるし、番組の台本だってよく目を通す。
人さまざまとはよく言うが、友達が出来れば仕事が出来ない奴なんて、居るだろうか。
実は鮫島はそんな人間だったり……。いや、それは無いか。元々友達なんていない性格と人を寄せ付けにくいような顔つきをしている。マネージャーなんて向いてもいねぇ。
「酷い……」
叶が小さくそうこぼした。鮫島には聞こえないような声だったと思うが、鮫島の藤原を鋭く睨む目は叶へと移った。
「あぁ？」
ドスの効いた声。
お前は不良か。
「なんか言ったか？」
「……」
黙り込む叶に俺は小さく溜息を吐いた。いや、叶ではなく、本当は鮫島に向けた溜め息だったのかもしれない。
性格は気に入らないし、そう思ったら顔だって気に入らなくなってくる。
「アンタ、なんか、本当にウザいなぁ――」
独り言かのように軽くそう呟いた。勿論叶の小さな声ですら聞き

取ったコイツの事だ。聞き逃すわけもなく。
般若みたいな鬼の形相のそいつはターゲットを俺へと返した。
あぁ、本当にもう――。

鮫エージェンシー　4

「喧嘩事は避けてよね、報道されたらどうするの？　私に迷惑かけないで。啖呵切られたんなら、とりあえず謝っときなさい。それか土下座。……芸能界に、下手に出られて悪い気する奴なんかいないわ」

ＴＶでちょくちょく出るようになって、何度目かの説教で言われた。

今や芸能プロダクションの社長までしている薺社長は、厳しいというか、毒舌な口調だった。誰にでも同じ言い草をし、それでも一人一人にちゃんと目を向けている。アイツのやり方は大方正しい。

『とりあえず土下座』でもしとけばいいなんて言われた時、正直出来るかアホ。なんて思ったけれど、その方が一番簡単に問題が解決する事は、ちゃんと分かったつもりでいた。

――土下座じゃなくても、…今度から謝れば……。

「おいてめぇ、今なんつった？」

そう心の中で思って、このザマだ。

「ウザいって言ったけど……？」

鮫島が偉い剣幕で俺を睨みあげて来たので、俺は少し呆れたように返した。この世界でそんな短気じゃ悪い事だらけだろうに。

馬鹿。俺も、コイツもだ。

ていうか、この場合は俺はどうしたらいいんだろうか。自分が悪いわけじゃない。基、俺はこの話しには何一つ関与はしていない。

「ニシオカは本当に教育がなってねぇみたいだな」

「アンタは幼稚園からやり直した方が懸命だと思うぜ？」

「……なんだと？」

ていうか何か俺も話しに混ざってね？

「そんなんじゃソイツが掴める仕事だって取り逃がすだろ。アンタ、向いてねぇよ」

そう思ったって、藤原が可哀そうで仕方なかった。その性格じゃコイツに反論だって出来ねぇだろう。だから俺が代わりに……なんて言ったら都合が良過ぎるだろうか。

「おい、ナツ……」

気まずそうに首を横に振りながら止めようとするザキさんの顔。それを無視して、俺は鮫島をジッとみた。

「良い度胸してんじゃねぇか」

なんだなんだと思ったら、気持ち悪くニヤリと笑いながら、ゆっくりとこちらに手を伸ばし、俺の服の襟もとをグイっと掴んできた。

こういう状況になれば避けるのもなんだが面倒臭くなって、俺は抵抗も何もしなかった。

――殴られたりしたり？

そうなったら俺薺に偉い怒られんだろうなー、みたいな。なんだか色々ややこしい事を軽く考えた。

そのほんの隙間。

「はーい、皆注目ー」

いきなり、一際大きな声が室内に響いた。発信源を辿ってみれば、入り口を開け、何やら５０くらいで厳しそうな顔をしている男と、これまた逆に優男な顔をしている３０代くらいの男が立っていた。

「えーと、これからお集まりいただいてありがとうございます。これから１０月から始まる月９ドラマ、Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ出演、及びスタッフの自己紹介を兼ねたミーティングを始めます。皆それぞれ席についてください」

さっきまでザワついていた会議室が一気に静かになり、みんなゾロゾロと席についていく。鮫島も藤原にさっきよりも強く裾を引っ張られ、諦めて乱暴に俺の服から手を放し、舌打ちだけして席へと戻っていく。

――薺の説教は免れたか…？

そう思っていたら、軽くザキさんにチョップされた。

「ヒヤヒヤしたぞ」

小さな声でそう言われた。
「ごめんごめん」
「じゃ、始めましょうか」
皆それぞれ席についたのを確認して、優男が厳つい顔をした男にそう言った。その言葉にうんと深く頷き、席を立つ。
「監督の野中吉竹だ。よろしく」
「僕は脚本の杉谷雄一です。本当はもう一人居るんですけど、彼ちょっとサボり魔でして、今日は欠席です、よろしくと伝えて置いてと、……そういう伝言です。…じゃあ、まずはキャストさん達から自己紹介お願いします」
自己紹介お願いしますと言われ、元々配られたキャストとスタッフの名前一覧を覗く。何故だか俺の名前が一番に来ていたので、最初は多分俺なんだろうか。
まぁいいやと、キャスト人は誰も立ち上がる事をしなかったので、俺が立った。
「伊瀬春樹（いせはるき）役のナツです。よろしくお願いします！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5198v/

Warmth Melt

2011年12月17日08時46分発行